

氏名	でんべれ むつさ あだま DENBELE, MOUSSA ADAMA
学位(専攻分野)	博士(学術)
学位記番号	博甲第327号
学位授与の日付	平成15年11月27日
学位授与の要件	学位規程第3条第3項該当
研究科・専攻	工芸科学研究科 機能科学専攻
学位論文題目	French colonization and modernization paradigm of West African cities – Analysis of architecture and city forms of Djenné and Bamako, Rep. of Mali – (西アフリカ都市におけるフランス植民地化と近代化のパラダイムに関する研究-マリ共和国・ジェンネ市およびバコマ市の建築と都市空間の分析-) (主査)
審査委員	教授 古山 正雄 教授 石田 潤一郎 教授 中川 理

論文内容の要旨

本論文は、フランスの植民地化政策が西アフリカ都市の近代化に与えた影響を考察することを主題としており、申請者の出身国であるマリ共和国の首都バマコ市及びジェンネを事例としてとりあげ、植民地化によって都市形態がどのように変化したかを明らかにしようとするものである。まずははじめに時間軸にそって、植民地化以前、植民地時代、独立後の3つの段階を想定して、植民地化以前の都市のあり方と植民地化された後の都市のあり方とを、都市形態の変化に着目して論考している。次に、植民地化がもたらした物理的な変化の結果生じた、あるいは物理的な変化の遠因ともなった目に見えない社会的変化を明らかにするために、言語論的アプローチによって、建築施設、民族グループ、その職能、民族グループの建築的／造形的な象徴に関して、墓地や都市の門の呼び名や地域名称の比較考察を行っている。

こうした作業を通じて、植民地以前の都市においては、民族グループは商業、漁業、農業、牧畜などの職能団体として特化する傾向を示し、都市内の一定の領域に壁を設けて集住し、グループ領域の間にあるオープンスペースをコモンスペースとして共用し、都市の運用をおこなう場としていたこと。また、フランス植民地化政策によって、こうした空間構造が壊され、フランス的な軸線重視の都市構造につくり変えられ、機能的かつ効率のよい管理システムが空間的にも導入されたことが示されている。しかしながら、マリ共和国の伝統的な地域社会では、規範やルールが文字によって書とどめられずに、話し言葉によって伝承されてきたために、植民地政府は、所有権の証明書が無い土地は所有者不明につき植民地政府が召し上げるという方策によって、伝統的な地域社会を破壊し、近代化のための用地の収用を行うという政策をおこなった。こうした事実を踏まえ、植民地政策の功罪と独立後の都市計画の目標などに言及している。

論文の目次に即して言い換えると、導入部において、マリ共和国の歴史と地理の概要を説明した後、1章では、フランス植民地化政策が西アフリカ都市の形態に与えた影響を論考している。すなわち、プレコロニアル都市とコロニアル都市の形態比較をおこなうことによって、部族間の境

界地でありかつコミュニケーションのための公的空間として、重要な政治的役割を担ってきたコモンスペースが、道路や一部は鉄道などの交通空間へと変更され、官庁街あるいは管理施設へと変質していく様子が具体的に示されている。第2章では都市形態の変化と同時に起こった、社会的な変化あるいは都市が一つの共同体として共有してきた文化的・精神的な変化を明示しようとしている。こうした見えない変化を明示的に論証するための基本的視点として、リングスティック・アプローチ、すなわち言葉に着目して、広場の名称、道路の名称といったオープンスペースの呼称の変化、都市城壁や門、共同墓地の名称や神の名などの考察、さらには、言葉の中でも最も重要な植民地統治のための法律を考察して、民族のすみわけに基づく伝統的な土地利用から、交通網に支援された機能的な土地利用への転換をメカニズムを描き出そうと試みている。

また最後の章では、植民地化がもたらした近代化を評価しつつ、植民地政策によって破壊された伝統文化の再建の重要性を謳っている。

論文審査の結果の要旨

本論文の内容は、アフリカにおけるイスラム都市、特にフランスの植民都市を主題としているが、日本においてはこの分野における研究者も少なく、情報としての希少性が高い。研究の方法に関しても、リングスティック・アプローチを試みるなど、新規性が認められる。都市や建築の研究者にとって関心が高い研究対象ではあるが、日本人研究者にとっては、アフリカのアラブ都市についての研究は、地理的、宗教的、文化的背景が異なるため未だ情報がいきわたらない現状にあり、本研究のもつ新規性と希少価値は評価できる。

こうした点はこの論文の利点であるが、同時に弱点もみられる。たとえば、植民地化と近代化の区別が不分明である点や、また文字に表記された歴史資料がほとんどないという事情もあり、地図や文献、法律といった基礎資料においても宗主国フランス側の資料に頼ることになるため、資料批判が不十分である。

こうした点を総合的に評価し、項目別に整理すると、まず情報としての新規性が認められること。表現に関しても素朴ではあるが判りやすいこと。審査つき論文を複数提出しており、一定の水準をクリアしていると認められること。さらに、マリ共和国側からの資料整備や歴史観の構築がいまだなされていない事情を勘案すると、今後この研究が本国においても外国においても発展する可能性が期待できること。以上の諸点を検討し、本論文が博士論文の水準に達していると判断した。

本論文の基礎となった学術論文2編と参考論文4編を以下に示す。

基礎となった学術論文

- 1 「French colonization impact to West African city form」、ムッサ デンベレ、古山正雄、平成14年度日本都市計画学会学術研究論文集、pp. 463-468、日本都市計画学会、2002年11月
- 2 「French Colonization and Urban Evolution in Djenne and Bamako、Moussa Dembele、Globalization and Urbanization in Africa, Ch12 , pp. 219-249, African Urban Spaces (Texas Univ.) 2003年12月 (in print)

参考論文

- 1 「French colonization impacts to West African city forms」、Moussa Dembele、Masao Furuyama、2002 年度日本建築学会大会梗概集 F1、pp. 819-820、日本建築学会、2002 年 8 月
- 2 「French colonization impacts to West African cities comparative study between pre-colonial with colonial city forms」、Moussa Dembele、Masao Furuyama、平成 14 年度日本建築学会近畿支部研究報告集、pp. 493-496、日本建築学会近畿支部、2002 年 6 月
- 3 「Linguistic approach to French colonial cities in West Africa cities: The case study of Bamako, Rep. of Mali」、Moussa Dembele、日本アフリカ学会第 40 回学術大会研究発表会要旨集、pp. 6-6、2003 年 5 月
- 4 「Lingistic approach to French colonial cities in West Africa」、Moussa Dembele、平成 15 年度日本建築学会近畿支部研究報告集、pp. 517-520、日本建築学会近畿支部、2003 年 6 月